



## はだかの王さま (36)

往来にいる人々も、窓から見ている人たちも、だれもかれもが口々に言いました。

「まあまあ、皇帝のあたらしいお着物は、たとえようもないじゃないか！ お服についているもすそも、なんてりっぱだろう！ ほんとうに、よくお似合いだ！」

みんながみんな、なんにも見えないということを、人に気づかれ



## はだかの王さま (37)

まいとしました。さもなければ、自分の役目にふさわしくないか、とんでもないばかものだということになってしまいますからね。皇帝の着物の中でも、こんなに評判のよいものはありませんでした。「だけど、なんにも着ていらっしやらないじゃないの！」と、だしぬけに、小さな子供が言いました。



## はだかの王さま (38)

「ちよいと。この罪のない子供の言うことを聞いてやっておくれ」と、その父親が言いました。そして、子供の言った言葉が、それからそれへと、ささやかかれていきました。

「なんにも着ていらっしやらない。あそこの小さな子供が言ってるよさ。なんにも着ていらっしやらないって！」



## はだかの王さま (39)

「なんにも着ていらっしやらない！」

とうとうしまいには、町じゅうの人たちが、ひとりのこらず、こうさげびました。これには、皇帝もこまってしまいました。というのは、みんなの言うことのほうが、なんだか、ほんとうのような気がしたからです。しかし、「行列は、いまさら、取りやめるわけにはい



## はだかの王さま (40)

---

かない」と、思いました。

そこで、前よりもいっそう胸をはって、歩いていきました。侍従たちも、ありもしないもすそをささげて歩いていきました。

つづく